



館長だより

山形県産業科学館

令和7年12月9日(火)

発行 館長 加藤智一

鳥たちの狩り

すっかり冬らしくなってまいりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。毎朝の通勤で通る霞城公園西門付近のお堀では、今年もいつもながらの「マガモ」の姿が、めっきり増えてまいりました。ところが、今年は昨年とちょっと違った点もあります。一つは、「川鵜」のペアとおぼしき真っ黒な存在と、それとは対照的な「白鷺」の存在です。そして、なんと、「カワセミ」もいるではありませんか。自転車をしばし停めて、じっと観察していたら、彼らの狩りの仕方が、なんとも個性的で面白いことに気が付きました。

「川鵜」は、言うならば「潜水型の狩り」。水面から結構な深さまで潜水し、一分近くも水中に留まっているではありませんか。ここはお堀ですので、主にコイやフナなどを捕食するのだと推察されます。ネット情報では、1羽あたり1日約400~600gの魚を食べるのだそうです。水中で魚を追いかけて、鋭いクチバシで捕らえる訳です。そして特に興味深い行動としては、狩りの後、水際で翼を広げて乾かす姿が見られることです。これは羽毛に防水性が弱いためで、潜水後に乾燥させる必要があるためだと言われています。

これに対して「白鷺」は、「待ち伏せ型の狩り」。水辺に立ち、じっと動かずに獲物が近づくのを待ち、瞬間にクチバシで突いて捕らえます。その立ち姿は、まるで水辺に置かれた彫刻のようにじっとしています。同じように「待ち伏せ型の狩り」をする鳥として世界的に有名な人気者は、日本では動物園でしかお目にかかれない「ハシビロコウ」という、アフリカの湿地に生息する大型鳥がいます。「白鷺」もビックリするくらい長時間、じっと動かずに獲物を待ち伏せする「動かない鳥」として知られています。「ハシビロコウ」は、アフリカ東部から中央部の湿地帯に生息し、体長は約110~140cm、翼を広げると2mを超える迫力ある姿を持ちます。特徴的なのは「木靴のよう」と形容される巨大なクチバシです。先端が鋭く曲がり、泥の中に潜む魚を捕らえるのに適しています。主食はハイギョやナマズ、ティラピアなどの魚類で、時にはカエルや小型のワニまで捕食します。水面に浮かんできた瞬間を逃さず、鋭いクチバシで一気に仕留めるのです。鳴き声はほとん

ど出せず、代わりにクチバシを打ち鳴らす「クラッタリング」でコミュニケーションを取ります。寿命は野生で約35年、飼育下では50年に達する長寿の鳥です。

そして、この度私がみつけた「カワセミ」も、水辺の枝に止まり、魚が水面近くに来るのを待って急降下し、鋭いクチバシで捕らえる「待ち伏せ型の狩人」です。鮮やかな青い羽と「水辺の宝石」と呼ばれる美しさで知られています。みつけた時は、今日一日、何か良いことが起きそうで、ワクワクしました(実際は何もありませんでしたが)。ところで、このカワセミの羽根ですが、色素ではなく「構造色」と言われるもので、羽毛の微細な構造が光を反射・干渉させることで青く見える仕組みなのだそうです。シャボン玉が虹色に見えるのと同じ原理です。そして「カワセミ」の求愛行動もユニークで、多くの鳥は、さえずりでメスにアピールしますが、「カワセミ」のオスは歌いません。「プレゼント作戦」なのです。自分で捕まえた魚をメスに渡し、受け取ってもらうことで求愛を成立させます。

身近な自然の中にも、深掘りすると、ビックリするような発見が満載です。大切なのは、疑問を感じる心と探究力ですね。産業科学館は、君達のそんな探究する前向きな姿勢を真摯にバックアップしてまいります。何が言いたかったのか本質が変わってしまいましたが、ご容赦ください。

